

長野市立博物館

Nagano City Museum

博物館だより

第91号 2014.9.30

祈りの造形 ～特別展「発掘された日本列島2014」より～



写真1 家形埴輪 高さ 132.0cm 史跡今城塚古墳（大坂府高槻市）
古墳時代後期 6世紀

はるか古代から、人々はさまざまな場面で祈りを捧げてきました。遺跡から出土する遺物の中には、当時の人々が特別な祈りや願いを込めたと思われる品があります。こうした品々は時を越え、現代の私達にも今なお強く訴えかける力を備えているようです。

今回は、11月より当館で開催する特別展「発掘された日本列島 2014 日本発掘」にて展示される予定の遺物の中から、古代の人々の「祈りの造形」をいくつかご紹介したいと思います。

おおきみ

大王への祈り…（家形埴輪）

大阪府高槻市の史跡^{いましろづか}今城塚古墳は、総長約350 m、総幅約340 mをはかり、第26代継体天皇の陵墓と考えられています。この古墳は二重の濠に囲まれ、その間にある内堤部に埴輪祭祀場が確認されました。幅10 m、長さ65 mに及ぶ祭祀場は4つに区切られ、300点を超える埴輪が整然と並べられていたことが分かっています。

表紙の家形埴輪（写真1）は日本で最大規模のもので、子どもの背丈ほどの大きさです。切妻部・身舎（もや）・高床部の3つの部分から成っています。この家形埴輪のほかにも、祈りを捧げる巫女や音楽を奏でる楽人、冠をかぶった男子、武人、鷹飼^{たかかいびと}人、力士などの人物埴輪や、牛・馬・鶏・水鳥などの動物形埴輪、太刀・盾・甲冑^{かっちゅう}などの武器形埴輪が発見されています。

これらの埴輪は、大王への鎮魂の儀礼の場面を再現していると考えられています。今城塚古墳は現在では史跡公園として整備され、埴輪祭祀場も復元されています。大王への祈りの儀礼が現代に甦るようです。

豊穣と再生の祈り…（ミミズク土偶）

土偶は妊娠した女性がモデルとされ、豊穣や再生を祈る道具と考えられています。土偶は時期によって形が異なりますが、縄文時代後期後半から晩期前半にかけて関東地方を中心にみられるものに、ミミズク土偶があります。

ハート形の刻み目のついた粘土ひもで顔の輪郭を造り、円板状の目と口を貼り付けた、頭でっかちのプロポーションでどこことなくユーモラスな感じのする土偶です。



写真2 重要文化財 ミミズク土偶 長さ 16.0cm
後谷遺跡（埼玉県桶川市）
縄文時代後期～晩期 約 3000 年前

埼玉県桶川市の後谷遺跡^{うしろや}出土の土偶（写真2）は、全体が赤く塗られています。頭の突起は髪にさした櫛^{あな}を、耳たぶに開けた孔にはめ込まれた木質は耳飾りを表現しており、おしゃれな縄文人の姿が浮かびます。当時の風俗を考える上でも貴重な資料となっています。



① 人形土製品

古墳での祈り… (ミニチュア土製品)

静岡県磐田市の明ヶ島^{みょうがしま}5号墳は南北18.5m、東西13.8mの方墳で、墳丘の盛り土中から4000点を超えるミニチュア土製品（写真3）が出土しました。その種類も実にバラエティーに富んでおり、人や動物、日用品、装身具、楽器、武具などがありました。これらミニチュア土製品は、古墳築造の際に行われたマツリで使用されたものと考えられます。

手づくねの素朴なもので、大きさはほとんどが10cm以下の手のひらサイズですが、男女の違いの表現など、小さいながらも特徴をうまく捉えていることが分かります。



② 農具・杓子・容器形土製品



③ 武器形土製品

写真3 重要文化財 ミニチュア土製品
明ヶ島古墳群5号墳（静岡県磐田市） 古墳時代中期 5世紀



写真4 地鎮具（須恵器 平瓶 最大径 20.2cm ・富本銭・水晶原石）
特別史跡藤原宮跡（奈良県橿原市） 飛鳥時代末 7世紀末

新都造営の祈り…(地鎮具)

奈良県橿原市の藤原宮大極殿院^{だいごくでんいん}の南門跡^{みなもんあと}から西へつながる回廊の基礎から、富本銭と水晶の入った須恵器の平瓶（ひらか）が見つかりました。「日本書紀」の記述には、692年に「藤原の宮地を鎮め祭らしむ」との記事があり、この地鎮具がそれに該当する可能性が高いと考えられています。この年は、持統天皇^{あすかきよみはら}が飛鳥浄御原から藤原京へ遷都する2年前にあたります。

平瓶は水や酒を注ぎ入れる容器で、祭りの道具として使用されました。平瓶の注ぎ口につめ込まれた9枚の富本銭のうちの2枚は接着したままですが、水晶の原石9点の方は、風化もなく当時の輝きをそのまま伝えています。中国の思想で「9」はめでたい数字とさ

れており、宝物を納めて新都の平安を祈ったものと考えられています。

祈りの造形には、人々の生命や自然に対する畏怖や畏敬の念、そして期待や感謝の念などがこめられています。直接ご覧になって、当時の人々の息吹を感じていただきたいと思います。

ご紹介した資料のほかにも、日本を代表する遺跡の発掘調査成果が勢揃いします。ぜひ、この機会に足をお運びください。

筆者：風間真起子（かざままきこ）

長野市立博物館本館に勤務する、考古担当の専門員です。長野市に来てからは、北陸の影響をうけた極細タイプの管玉に魅せられ、弥生時代を新たに勉強中です。

ゾウがつなく、博物館とヒト

～戸隠地質化石博物館の場合～

シンシュウゾウ発掘 公開30周年

戸隠地質化石博物館には、戸隠川下産シンシュウゾウ下顎化石が展示されています。この化石は1983年12月に発掘されたもので、翌84年に戸隠村郷土資料館で公開されました。そして94年にはゾウ化石としては初めて長野県天然記念物に指定されたものです。この化石の発掘・公開30周年、長野県天然記念物指定20周年を記念して、夏の企画展「長野のゾウーシンシュウゾウ発掘30周年記念ー」展を開催しました。

この化石の発見者、塚田良雄氏は小学校5年生の時（1950年頃）崖に変なものが埋まっていることに気づき、クジラの化石かと思ったといいます。このことを誰にも話さずに30年以上の年月が流れましたが、偶然バスで隣に乗った中川政幸氏（郷土資料館職員）にその事を告げたのです。それが当時の戸隠村教育委員会による発掘へとつながりました。

発掘後、クリーニング作業が終了すると、左右の下顎骨と第1・第2大臼歯合計4本

がそろった貴重な標本で、ステゴドン科のゾウの一種、シンシュウゾウ、学名 *Stegodon shinshuensis* と同定されました。シンシュウゾウは1970年、中条村（現：長野市中条）裏の沢から信州大学理学部が発掘した化石をもとに種名がついたゾウで、当時はステゴロフォドンゾウの仲間とされました。しかし、その後の研究でステゴドン科に変更となったゾウです。2000年に国際動物命名規約が改訂され、これまで無効とされていた亜種名が有効となったことから、三重県産の化石に基づいた亜種 *miensis* が有効となりました。現在、学名は *Stegodon miensis* に改められ、ミエゾウと呼ばれます。

肩までの高さが約4mもある日本でも最大級のゾウで、約500万年前に中国大陆から陸続きだった日本へと渡来しました。その後、このゾウは日本が大陸から切り離されると独自の進化をとげ、約200万年前には肩高約2mのアケボノゾウへと小型化してきました。



写真① 戸隠川下産シンシュウゾウ下顎骨化石（長さ約60cm）

アジアゾウ骨格標本づくり

企画展では、この下顎化石をメインに、県内各地のゾウ化石を展示しましたが、ゾウの大きさを実感してもらうため、当館で作成したアジアゾウの全身骨格標本を展示することにしました。そこには多くのボランティアが関わった物語がありました。はじまりは当館がオープンした 2008 年の 12 月、茶臼山動物園のアジアゾウ（♂：ダンボ）がなくなったという一報です。当時の副市長から「骨格標本にしたら」との一言があり、動物園とタッグを組んでの標本づくりが始まりました。

作業は、開腹して病状の検討から始まり、四肢や鼻、肋骨、頭骨、骨盤を順番に外していきます。周りについている筋肉をできるだけ除去し、深さ 2 m ほどの穴を掘って埋めました。まず埋めることで、骨の周囲の筋肉や皮などを土壌生物たちに分解してもらい骨だけにするためです。分解したといってもゾウの頭骨は 120kg、下顎骨は 60kg、骨盤は 180kg ほどの重さがあり、重機を使っでの埋設です。

翌年 12 月末、ゾウを掘り出すぞ！という当館からの連絡に応じたボランティアは約 50 名。関西や関東などから駆けつけた 2 歳から 60 代までの老若男女です。まず表層 1



写真② 生前のダンボ（茶臼山動物園提供）



写真③ みんなでゾウの骨を掘る

m 程を重機で掘り下げ、4 チームの交代制で、慎重に手作業での発掘をおこないました。周囲には雪が積もり寒い中での作業でしたが、皆楽しそうにドロにまみれていました。午後にはゾウの骨がその姿を見せはじめました。頭骨は重機を使って引き上げ、泥で汚れていた骨は、雪をこすりつけたりホースで水をかけたりして洗浄。戸隠まで運び、骨が揃っているかの確認も兼ねて玄関前に並べて記念写真を撮影しました。2011 年には、神奈川県の高校の生物部にも骨を洗ってもらいました。まだ腐敗臭の残る骨たちを彼らは楽しそうに洗っていました。その後も骨は水に浸け、脂や臭いを抜き、そして 2012 年春にほぼ完成。大きな大腿骨は常設展や出張展示で公開し、子どもたちを喜ばせていました。



写真④ 掘り出した骨を並べ記念写真！

全身骨格の組み立て

今回の企画展では、平面に並べる「開き」(私たちはこう呼んでいる)で展示するのが楽なのですが、立体的に組むことにしました。ゾウのような重い骨格の場合、相応の設備や足場が必要なのですが、今回は廃材で土台をつくり固定する方法でチャレンジ。土台の整備や色塗りや企画展の撤収作業もボランティアの協力をいただき、さらに長年お抱え大工としてサポートをしてくれる方の熟練の技もあって、土台は短時間で設置できました。

そして組み立ての日に集まったのは 15 名

ほど、もっとも重い頭骨を下から 2 本の柱で支え、首のところで倒れないように土台に固定する作業から開始。まず頭骨を持ち上げる足場をつくり、そして頭骨を首の部分で柱に固定します。しかし位置がなかなか決まらず、重い頭骨を持ち上げ続けなければなりませんでした。午前 9 時頃に始まった作業はお昼までかかり、みんな汗だく…。しかし、その後の背骨や四肢骨の展示は順調に進み、その日のうちに終えることができました。同時並行でゾウのシンボル、「鼻」も作成。翌日は 10 名ほどで残った肋骨や鼻など体のシルエットを貼り付けました。そして、見事完成！



写真⑤ 組みあがったダンボの全身骨格



写真⑥ ゾウの前でハイ、ポーズ！
(神奈川や茨城からの参加者も！)

ゾウの解体からここまで4年半、その間の作業を支えたボランティアはのべ100名以上にのぼります。こうした作業の他、展示解説や資料収集、調査研究の面で当館を支えるボランティアは年間のべ300名をこえます。いつまでも応援したいと思う博物館でいられるよう、手をかえ、品をかえ、おもしろい企画や趣向をみんなで考え続けています。

著者：古賀和人（こがかずと）

戸隠地質化石博物館勤務の動物担当専門員。ため池にすむ魚類シナイモツゴをはじめ水生昆虫などの研究、脊椎動物の骨格・皮などの標本作りを担当。

博物館のHPアドレス

<http://www.city.nagano.nagano.jp/museum/>

長野市立博物館

〒381-2212 長野市小島田町1414
TEL:026(284)9011

戸隠地質化石博物館

〒381-4104 長野市戸隠栃原3400
TEL:026(252)2228

鬼無里ふるさと資料館

〒381-4301 長野市鬼無里1659
TEL:026(256)3270

信州新町美術館・有島生馬記念館・信州新町化石博物館

〒381-2404 長野市信州新町上条88-3
TEL:026(262)3500

ミュゼ蔵

〒381-2405 長野市信州新町37-1
TEL:026(262)2500



▲長野市立博物館
携帯サイト